

「20年継続体制」に向けて日本側の支援強化を

2016年度現地事業報告

アフガニスタンで起きた出来事から今の世界を眺めるとき、世界は末期的状態にさしかかっているようにさえ見えます。無差別の暴力は過去の自分たちの姿です。敵は外にあるではありません。私たちの中に潜む欲望や偏見、残虐性が束になるとき、正気を持つ個人が消え、主語のない狂気と臆病が力を振るうことを見てきました。このような状況だからこそ、人と人、人と自然の和解を訴え、私たちの事業も営々と続けられます。ここは祈りを込め、道を探る以外にありません。…そして、この祈りを共有する多くの日本人とアフガン人の手で事業が支えられてきたこと、そのことに救いを見るような気がしています。

PMS 総院長／ペシャワール会現地代表 中村 哲

二〇一六年度の概要

異常気象と送還難民

二〇一六年五月から六ヵ月間、アフガニスタン東部は極端な少雨が続き、大干ばつ^{かんばつ}の再来が危ぶまれた。天水に頼る農地は作付けできなかつた。現在、全アフガンの耕地のうち灌漑^{かんがい}可能な土地は半分に満たず、相当な打撃があったと見られている。

二〇一七年一月になって降雨があつたものの、降雪量が少なく、水不足は依然として続くものと思われる。

追い打ちをかけるようにパキスタンからのアフガン人難民の強制送還の動きが活発化し、一年間で百万人以上が東部方面に戻つたと報ぜられた。アフガン政府は難民を東部にとどめ置く方針を発表、受け入れ準備を進めた。だが全土で治安が悪化、作業地のあるナンガラハル州でもIS（イスラム国）の動きが活発化した。対する米軍は専ら空爆に頼り、誤爆で各地に被害が出ている。この間隙で犯罪者の動きも激しくなり、警察と軍が監視できるのは点と線になっている。

送還難民の約七〇%が東部（ラグマン州、ナンガラハル州、クナール州）出身と言われ、大半が農村地帯である。しかし、凶作も重なって難民を吸収する余力なく、



マルワリードⅡ用水路壁の蛇籠工に取り組みヤールモハマッド監督（左）率いる作業員たち（2017年6月1日）

多くの人々がジャララバード市内とその北部に集中した。PMS作業地では各村の爆発的な人口増加が起き、国道沿いは至る所にバザールが林立、想像を超える雑踏^{ざつたく}が俄かに出現した。難民だけでなく、他地域の不作や治安悪化によって多くの者が逃れてきたからである。

このため、PMS作業地は人口密集地帯となり、交通渋滞で移動にさえ困難をきたす状態である。それでも作業地の治安はさほど荒れておらず、住民とよく一致協力、

仕事は遅滞なく進められた。

PMS年度事業のあらまし

一四年一〇月に始まったミラーン堰（ベースト第二堰）は二回の洪水期を経て、九月に竣工、第四次JICA PMS共同事業（マルワリードII）が、ミラーン堰対岸地域で開始された。これまで蓄積された経験が活かされ、二〇一七年三月までに、予定の工程を完了した。

ガンベリ沙漠方面では、最大の懸案であった主幹排水路の再建が軌道に乗り、一七年三月までに全線一・七kmを开通了。これによりPMSはマルワリード用水路沿いの水紛争に完全に終止符を打ち、ガンベリ地域の灌漑が保障された。湿害の軽度のものを含めると、シギ・シェイワ両村落群で約一〇〇〇畝を超える広大なものである。安定灌漑農地が全村で飛躍的に増加、地域との絆はさらに深まった。〇三年からのマルワリード用水路建設は、これを以て名実共に完成する。

「緑の大地計画」二十年継続体制

PMSでは、今後二〇二〇年までに予定地域の安定灌漑を実現すると共に、次の展開を見据えて維持体制の確立を図る。このため、一六年三月にガンベリ試験農場の貸与契約を二〇年として、アフガン政府と協

約を結んだ。

次の二〇年間（二〇三六年度）に新たな展開を予測し、これに備えるためである。見通しがつかない政情の中で、いつでも変化に即応できる体制をとり、水利施設II地域の護りを固める。こうして農村社会に土着化し、維持の上で予期せぬ事態に備え、将来的に「モデル」としての役割を發揮する。広域展開に際して、これが不可欠の基礎だと思われる。

日本ペシャワール会側も既にPMS・Japan（PMS支援室）を設置、この動きに歩調を合わせて強化を図り、長期継続体制を目指すに至った。

1 医療事業

国際救援組織が殆ど撤退する中、地域で重きをなしている。

一六年度の診療内容が別表の通り（別表1）。

2 灌漑事業

主な工事は別表

2の通り。一六年度は将来の広域展開と、そのための「二〇年継続体制」へ向け、準備段階

に入った。

「緑の大地計画」は、二〇二〇年までに計画地域（安定灌漑面積一六、五〇〇畝、人口六五万人）を完成し、広域展開のためのモデルケースとする予定である。

◎ミラーン堰（ベースト第二堰）

一四年一〇月に着工したミラーン堰は、一六年九月に竣工した。技術的には以下が新局面で、新たな工夫が凝らされた。

- ①浸食されやすい軟弱地盤での堰造成
- ②砂州移動と膨大な土砂堆積の対策
- ③石出し水制を組み込む護岸方式
- ④不安定河道II砂州の固定

今後も観察を続け、改修を重ねて強化していく。特に土砂堆積を避ける「部分可動堰」は、既にカシコート堰で試みられていたが、ミラーン堰でスタイルが決定し、有用性が実証されたと思われる。

別表1 2016年度 診療数及び検査件数

国名	アフガニスタン
地域名	ナンガラハル州
施設名	ダラエヌール診療所
外来患者総数	43,612
【内訳】 一般	32,079
ハンセン病	0
てんかん	573
結核	187
マラリア	6,913
外傷治療総数	3,860
入院患者総数	—
検査総数	12,046
【内訳】 血液一般	752
尿	1,497
便	2,078
ハンセン病塗抹検査	0
抗酸性桿菌	170
マラリア	6,884
リーシュマニア	207
その他	458

ミラーン堰対岸の灌漑計画（マルワリード第Ⅱ堰）

趣 旨

JICAとの共同事業で完成したミラーン堰の対岸（クナル河左岸）には、4ヵ村に約3万人が居住する。同地はナンガラハル州の中でも辺地にあり、援助が行き届きにくい貧困地域である。同地域はクナル河左岸にあり、上流はカシコート地方（2014年・共同事業で取水堰建設）、下流はカマ地方（2012年・取水堰建設）に連続し、上下流約8kmのベルト地帯を成している。かつては耕地850%を擁する大きな村落群であった。

しかし、近年頻発する夏の洪水や冬の低水位で取水・灌漑に困難が続き、次第に荒れていった。特に2010年、2013年、2015年と立て続けに起きた記録的な洪水で、耕地の約60%に相当する500%を失い、一時は村民の大半が難民化した。

2015年の洪水では、分流が発生してクナル河を二分、下流にあるミラーン堰（当時PMSが建設中）の水量が激減して取水に困難を来たした。取水方法にも問題があり、洪水流入と表土の流失を促し、近年の気候変動による河川の変化（洪水と極端な低水位）に適応できないと思われる。

同地の取水設備を整備して適切な護岸を行えば、難民化した村民の帰農を促し、同地4ヵ村の復興を約束すると共に、対岸（右岸）にあるミラーン堰、シギ村落の安定に大きく寄与することは疑いない。加えて、本事業ではこれまで培ってきた技術・経験が全て活かされ、人員の訓練の場を提供して、次の飛躍を期待できると思われる。

水はアフガン農民にとって生命線である。長引く戦乱に加え、気候変動による農地荒廃は、致命的な打撃を与えてきた。同地の復興によって、PMSが実施してきた「緑の大地計画」が完成に近づき、以て東部アフガンで農村復興の範となることを期待する。

◎**用水路・堰の名称**；マルワリード第Ⅱ堰（村落間抗争を避けるため、特定村落の名を冠せず）

◎**期間（第一期）**；2016年10月から2018年9月（2年間）

◎**場所**；クナル河左岸のカチャラ、コーティ、タラーン、ベラ村落
シェイワ郡・ナンガラハル州・アフガニスタン国（11頁下段地図参照）

◎**工事内容（第一期）**；

- ・取水堰（石張り式斜め堰、堰幅約250m）
- ・取水門（二重堰板方式、取水量2～5 m³/秒）
- ・主幹水路（ソイルセメント・ライニング、水路壁に柳枝工・ふとん籠工、全長4.9kmのうち、第一期・約1.7km）
- ・沈砂池（送水門2、排水門2を備える）
- ・護岸工事（根固め工を伴う連続堤防、全長8.4kmのうち約5 km）
- ・植樹（堤防沿い樹林帯）

◎**裨益人口**；約28,000名（同地域住民）、対岸の安定を入れると更に大きい。

◎**灌漑面積**；約850%（既存耕作地を含む）

◎**設計者**；PMS（ピース・ジャパン・メディカル・サービス）

◎**施工者**；PMS（ピース・ジャパン・メディカル・サービス）

◎**推定総工費**；約7億円

◎**全建設後の観察期間**；5年間（2020年～2025年）、PMS現地の責任で実施

別表2 「緑の大地計画」の経過と予定表

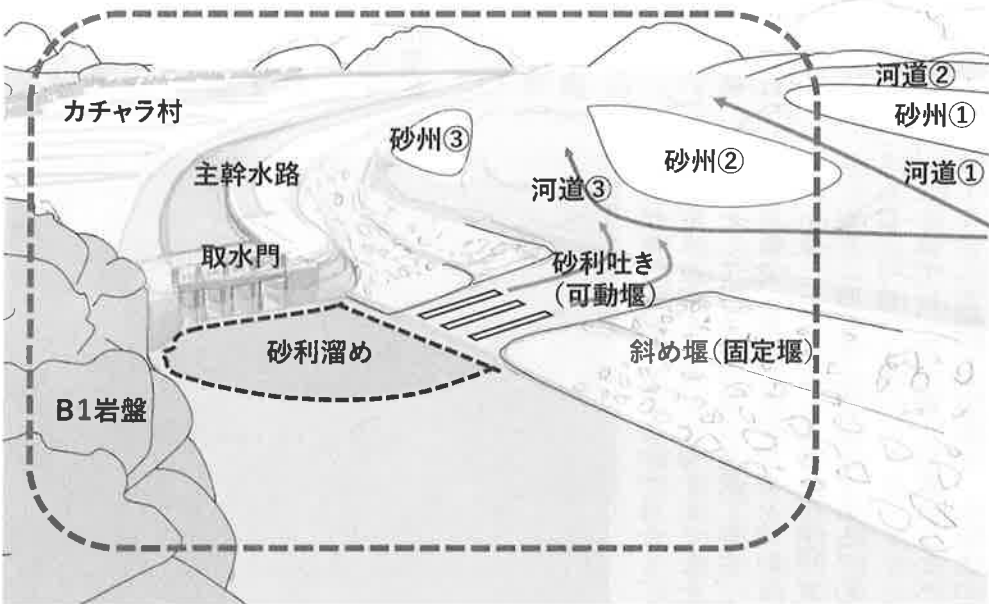
■ 建設 □ 維持観察

堰の名称	所在地	'03~'10	'11	'12	'13	'14	'15	'16	'17	'18	'19	'20
マルワリードⅠ	シェイワ郡・ジャリババ						沈砂池改修	取水門改修	改修			
シェイワ堰	シェイワ郡・カンレイ村											
カマ第Ⅰ堰	カマ郡・上流域								改修			
カマ第Ⅱ堰	カマ郡・中流域								改修			
ベスード第Ⅰ堰	ベスード郡・カシマバード											
タブー堰	ベスード郡・タブー地域								廃止、ミラーン堰へ統合			
カシコート連続堰	シェイワ郡・カシコート											
ベスード第Ⅱ堰	ベスード郡・ミラーン											
新シギ堰	シェイワ郡・シギ地域											
マルワリードⅡ	シェイワ郡・カチャラ村											
バルカシコート堰	シェイワ郡・バルカシコート										延期	
シギ延長路												
クズカシコート主水路												
ガンバリ給排水路												
ガンバリ農場												
訓練所(他地域展開への準備)												

なお本堰はベスード郡クナール河沿いの一、一〇〇畝を潤すが、安定した本堰にタブー流域五〇〇畝を統合した。タブー堰を廃止し、現在ミラーン堰の灌漑面積は一、六〇〇畝である。

◎マルワリードⅡの着工
ミラーン堰対岸は、4カ村に三万人が居住する。一五年夏の出水で同堰対岸上流に分流が発生、堰を通過する水量が激減してミラーン側が取水困難に陥ると共に、対岸村落(コーテイ、タラーン、ベラ)では耕地の半分が冠水または流失した。対岸の村民は一斉にパキスタンへ難民化した。PMSが新河道の閉塞と約二・五kmの護岸を行って洪水被害の進行を食い止めた。

ミラーン堰維持のためにも同地域の安定は欠かせない。一六年二月、対岸自治会とPMSとの間で協約が成り調査を開始、州行政やJICAが協力、一六年一〇月から四年間をかける対



マルワリードⅡ堰と取水門の鳥瞰図

岸地域の復興計画(マルワリードⅡ)が計画された(詳細は4頁)。
二〇一六年一〇月に第一期二カ年の工事

が最上流のカチャラ村で始まった。一七年三月までに堰の仮工事を終了、沈砂池まで約1kmの主幹水路に送水を開始した。これによって、最上流のカチャラ村の灌漑農地が倍増し、帰還難民の爆発的增加に悩む同村に大きな安堵を与えた。また、洪水対策で護岸の緊急仮工事が急ピッチで進められ、一七年六月現在、護岸線は予定八・五kmのうち、六km地点を工事中である（うち約二・五kmはミラーン堰工事の一環で行われた分流のしめきり堤）。

技術的にはこれまでの経験が大いに活かされ、「部分可動堰」+固定堰（湾曲斜め堰）のスタイルが確立、完成度が最も高いものとなっている。土砂堆積がミラーン堰と同様、大きな課題であったが、本堰の建設によって決着が期待されている。

また、現場と事務所が一体となって工事の手順に慣れ、異例の速さで建設が進められたことも、特筆すべきである。

折よく難民の帰郷時期に重なったことは、地域にとって大きな意味を持った。臨時ではあるが、村々は数百名の雇用を得て農地拡大に寄与し、難民の帰農が促された。

◎シェイワ郡全域の湿地処理＝マルワリード用水路の実質的な完成

一年四ヵ月にわたる主幹排水路工事約一・七kmが間もなく完了する（詳細は一五年度報告―会報一二八号を参照）。

マルワリード用水路建設に伴う湿地処理は、長い間の懸案であった。二〇一五年までに大小約六〇kmを超える排水路網で湿地が処理されてはいたが、排水力が限界に達してガンベリ沙漠開拓が危ぶまれていた。主幹排水路の通過するシギ上流域全体が低地で、沙漠開拓に伴う湿地化が懸念されていたからだ。遅くとも一七年八月までに同工事が終了するのは確実である。

ここでも帰郷難民があふれ、PMSは可能な限り人海戦術を採用、数百名の作業員の雇用を確保した。

排水路の恩恵はシェイワ郡約二、〇〇〇畝に及び、これによって「マルワリード用水路建設」が名実共に完成、ガンベリ沙漠開拓を保証した。

◎他地域展開への準備

PMSは以後の工事を「他地域展開への準備」と位置づけ、FAO（国連食糧農業機関）とも協力、以下が一六年度に行われた。

- ① 訓練所の建設
- ② 実習教材の準備

訓練所はミラーン堰の空き地に建設され、PMSの各取水設備にアプローチしやすく、今後の維持の上で利便性が高い（11頁下段地図）。訓練所は宿泊施設に簡単な教室を併設したもので、現場で働きながら学ぶ者を対象とする。一般的な河川工学や



ミラーン堰近くに建設中の訓練所（2017年4月26日）

灌漑技術の知識を教えるのではなく、PMSの取水設備を実際に体得することを主な目的としている。各村の農民、地主、水主らが対象で、読み書きの能力を問わない。

一七年三月までに基礎と一階部分が成り、現在二階部分を建設中である。約六〇名が宿泊可能である。

日本側では、山田堰土地改良区とペシャワール会（福岡）が協力し、山田堰の模型やビデオなど、訓練のための教材作成が進められた。

基本方針の要約は以下の通り。
一、文化や地勢・気候の類似した東部アフ

ガンを中心に、徐々に且つ確実に拡大。
二、実事業を継続しながら、その中で「土着の実戦部隊」を組織的に育成。

三、中央集権的な方法でなく、地域中心、かつ住民の自主性を尊重。

現下の不穏情勢を考慮し、「緑の大地計画」が区切りを迎える二〇二〇年頃までには体制を整える予定である。

◎カシコート方面の工事を延期、

カマ第一・第二堰の改修

「マルワリードII」と排水路工事の見通しが立つ段階で、カシコート方面の工事が計画されていたが、難民の急増と治安の悪化で動きがつかなかった。広域で複数にまたがる作業地は管理困難と判断、当面の計画を延期した。

代ってマルワリードIIの下流に隣接するカマ堰の最終的な改修を計画している。カマ堰は「緑の大地計画」の中で耕地面積が最大で、I・II堰併せて約七、〇〇〇畝、全体の約半分を占める。年々の小改修で安定しているが、砂州移動の及ぼす影響が問題になっている。かつ帰還難民の最大の吸収地である。万一の混乱に備えて部分可動堰を設置、安定給水を更に確実なものにする。一六年度は測量を繰り返し、一七年に施工すべく計画された。

※部分可動堰＋湾曲斜め堰について

日本では可動堰を河道全体に設置し、倒

伏式のゲートで油圧電動式、コンピュータ

制御である。冬の低水位期に水位を上げて取水を安定させる便がある。現地では建設が不可能なので、堰板手動式で増水期前にゲートを開放する。また、コンクリートの特性を活かし、深い急流を作れば土砂対策に極めて有効。PMSでは、岩盤を背にした取水堰で土砂吐きと兼用で斜め堰（固定堰）と組み合わせる方式が定着した。堰造成に際して架橋し、交通路を確保でき、工期を著しく短縮することができる。カシコート堰で試され、ミラーン堰で実用化された。

湾曲斜め堰は、一昔前まで日本でも行われた固定堰の工法である。斜め堰上流側を湾曲させて越流する水を河道中央に集め、対岸への影響を防ぐ。

3 農業・ガンベリ沙漠開拓

◎PMSガンベリ農場

ガンベリ沙漠では、二〇〇九年、用水路の開通と同時にガンベリ農場を拓き、PMSの自給体制を整え、用水路維持に役立てようとした。これが「自立定着村」構想である。その後農地法の改正で居住区ができなくなり、ベスード郡の一角に移した。

一六年二月、アフガン政府と協約、開墾地二三五畝を農地として半永久的に借用する契約が成った。契約は二〇年毎に更新さ

れ、PMSの解散がない限り、継続される。排水路問題が解決した現在、急速に開墾が進むことが予想される。

◎オレンジの出荷

一六年度の最大の成果は、柑橘類の結果が観察され始めたことで、移植したオレンジ約一二、〇〇〇本のうち数パーセントで結果を確認した。出荷に向けて期待が高まっている。小麦は約六〇畝で作付けが行われ、ヘクタールあたり約二トン、米はヘクタールあたり二・三トンの収穫を得ている。ザクロは品質が今一つで、苗木の植え替えまたは柑橘類への変更を検討している。畜



ガンベリ農場で刈り取った小麦の脱穀作業（2017年5月18日）

別表3 植樹総数(2003年3月から2017年3月まで)

種類	場所	2003~07年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年(1~3月)	合計
ヤナギ	用水路の両岸、河川工事	116,050	55,380	97,380	60,750	73,315	23,650	37,073	18,400	39,650	14,700	3,900	540,248
クワ	用水路土手	7,000	2,750	8,578	4,430	140	292	0	0	0	0	0	23,190
オリーブ	用水路土手、オリーブ園	2,000	0	840	0	0	0	1,424	1,275	240	136	0	5,915
ユーカリ	砂防林、護岸樹林帯	2,500	1,000	11,478	39,584	22,350	28,196	7,150	7,500	2,611	500	3,659	126,528
ピエラ	ガンベリ沙漠	0	300	600	1,165	165	2,083	175	75	0	0	0	4,563
紅柳	砂防林	0	15,100	71,300	14,356	9,887	22,317	3,573	780	265	0	0	137,578
シーシャム	護岸樹林帯	0	0	0	0	0	0	4,614	1,400	2,000	6,270	0	14,284
ポプラ	ガンベリ沙漠	0	0	0	4,900	10,786	1,850	0	220	0	0	0	17,756
イトスギ	モスク、学校、公園	0	0	0	60	195	300	0	0	0	110	0	665
果樹	ガンベリ果樹園	600	0	0	193	0	6,034	5,283	9,185	1,458	1,822	4,348	28,923
その他		0	0	0	132	190	412	144	50	26	0	1,073	2,027
		128,150	74,530	190,176	125,570	117,028	85,134	59,436	38,885	46,250	23,538	12,980	901,677

産関係で進展が見られ乳牛一頭、子牛二頭となり、わずかではあるが生乳からの収入が毎月発生している。

日本大使館が協力したナツメヤシ園の造成は、早生種の苗を移植、一七年三月に完了した。

◎植樹

一六年一月～二月の植樹数は二三、五三八本、大半が新設用水路沿いの柳枝工と護岸工事に伴う樹林帯造成で占められる。一七年三月までの総植樹数は九〇一、六七七本である(別表3)。

4 ワーカー派遣・その他

◎支援室の強化と二十年継続体制

現場に中村一名が常駐した。事務量が膨大となり、ペシャワール会事務局内に「PMS支援室」が設置されたが追いつかず、更に専従の増員強化が計画されている。支援室は事実上ジャラバード事務所と一体化し、円滑な業務を遂行する。

今後「二〇年体制」の日本側の要として機能すべく、基金団体であるペシャワール会と、現地事業体であるPMSとの役割分担が明確にされた。

また、実情を知る上で現地との交流を活発にすることの必要性が痛感され、一七年四月、シア副院長一行の歓迎会が催された。長期継続のためには、今後も交流の機

会を増やすこと、将来に備えて基金を蓄積することが、ペシャワール会とPMSの間で確認された。

二〇一七年度計画

二〇一六年度の連続である。

河川・灌漑関係では、対岸コテージ、タラン、ベラ、カチャラの4カ村の復興に力を注ぐ(「マルワリドII」)。約八五〇畝のうちカチャラ村二〇〇畝の安定灌漑、全既存耕地の送水路確保、洪水対策を計画している(11頁上段地図)。

カマ堰改修は一七年一〇月に準備を開始、同年一月から一八年二月までの4ヵ月間で一気に部分可動堰設置を進める。

訓練所の建設はFAOと協力して一七年十月までに竣工予定。教材も同時期にそろえ、訓練計画の日程が作成される。しかし、泥沼の治安情勢の中で小さくない工事を抱え、計画通りに進めるのは困難であるため、柔軟に対処する予定である。

最大のものは「二〇年継続体制」の準備である。PMSジャラバード事務所の改組、日本側PMS・Japan(PMS支援室)の拡充を執行し、長期に備える。

なお、カシコト方面は当分大きな工事は無理と判断され、情勢の安定する時機まで待機する。全体に現下の情勢は予断を許さず、短期的に計画の変更や延期があり得

るので、事態を注視して頂きたい。

二〇一六年度を振り返って

ゆく者は斯く^かの如しか。昼夜をおかず。ペシャワール赴任から三三年が経ちました。歳をとったせい^かか、川の流れを見ながら、この間の出来事を夢のように思い返すことが多くなってきました。多くの友人や仲間、先輩たちも他界し、ここまで生き延びて事業が続いていることを奇跡のように感じています。

最近アフガニスタンの報道が絶え、偶^{たま}に日本に伝わるのは爆破事件、テロ、誤爆や難民など、恐ろしいことや悲しいことばかりです。いつの間にか「テロ」という言葉が人々の頭脳に定着し、対テロと言えども正当化できるような錯覚が流布しています。しかし、今世界が脅えるテロの恐怖は、一六年前の二〇〇一年、「アフガン報復爆撃」に始まりました。

あの時が分岐点でした。飢餓に苦しむ瀕死の小国に対し、世界中の強国が集まってどめを刺しました。無論、罪のない大勢のアフガン人が死にました。そして「二次被害」の一言で、おびただしい犠牲は「仕方ない」とされました。まるで魔女狩りのようにテロリスト狩りが横行し、どんな残酷な仕打ちも黙認されました。平和を求め声も冷たい視線を浴び、武力が現実的解

決であるかのような論調が横行しました。文明は倫理的な歯止めを失い、弱い立場の者を大勢で虐待することが世界中で流行り始めたのです。別の道は本当になかったのでしょうか。

他方、干ばつと飢餓はやまず、多くの人が依然として飢餓と貧困にあえいでいます。アフガニスタンで起きた出来事から今の世界を眺めるとき、世界は末期的状態にさしかかっているようにさえ見えます。無差別の暴力は過去の自分たちの姿です。敵は外にあるのではありません。私たちの中に潜む欲望や偏見、残虐性が束になると、正気を持つ個人が消え、主語のない狂気と臆病が力を振るうことを見してきました。

このような状況だからこそ、人と人、人と自然の和解を訴え、私たちの事業も宮々と続けられます。ここは祈りを込め、道を探る以外にありません。祈りがその通りに実現するとは限りませんが、それで正気と人間らしさを保つことはできます。

そして、この祈りを共有する多くの日本人とアフガン人の手で事業が支えられてきたこと、そのことに救いを見るような気がしています。

今また二〇年継続体制を打ち出し、事業を次の代に引き継ぐ時がやってきました。この良心の絆を絶やさず、最後の体当たりのもつり^{もつり}で臨みたいと考えています。これ

までの温かいご関心に感謝し、ご協力を切にお願ひ申し上げます。



中村 哲^{なかにし たく}：九州大学医学部卒。専門は神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、

一九八四年パキスタン・カイバル・パクトゥンクワ州（旧北西辺境州）の州都ペシャワールに赴任。ハンセン病コントロール計画を柱にした、貧困層の診療に携る。八六年からはアフガン難民のための事業を設立し、アフガン北東山岳部に三つの診療所を開設。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も開始。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大干ばつ対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千六百カ所以上）事業を実践。さらに〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を開始。〇三年三月からは灌漑水利計画に着手し、一〇年三月全長約二五キロが開通。ダラエヌール診療所の年間診療数約四三、六〇〇人（二〇一六年度）。



建設中の交通路・連続堤防及び用水路・排水路予定ルート



PMSの水利事業で安定灌漑される予定地域 2020年